

いとさい

す、頓ての降り出しさうな夕立前の空も重い雲のあるやうな感じの
 せられて其可厭々々言語も絶えたることあれど、また其曇つた
 るところ、黒雲の翳させるところを走り出やうといふ勢もなく、
 猶それよりの一層暗く、日の光り月の光りもない場所へ逃て行きな
 いやうな卑怯な心が、關はぬ關はぬ爲かけた悪事を中途で止むるな
 どいふことあるべきやと腹の底で力む異なる強みのある無法な心と揉
 み合ひ捻ぢ合ふ苦しむ、人の長閑な太陽の光り浴れを我は太陽の怖
 くて何となく往來の中へ出るも敵國の中へでも行くやうな心地し、
 日頃の元氣も引き替へ口さくことさへ少くありぬ。人間太陽の光り
 の中へ住むこと叶はぬやうなれば、形骸こそ自由の世界へ住め魂魄
 の道理の半の中へ在るも同然、彦右衛門いたづらに悶え苦しみて平
 日の輕蔑したる彌吉が、何知らぬ佛面してお俊が呉れし菓子賞翫す

いとさい

るよ餘念なき有様を羨みけるが、抑彦右衛門が了見よての第一庄
 兵衛の今日も明日も明後日も一年も二年も歸つて來ざるやう爲て欲
 なく、それ叶はぬばお俊めが急病頓死な爲て呉れたく、それも叶
 ぬべ大熱病になりと自分が懼つて隣する間は彼世とやらへ行て
 仕舞ひたきこと、つくづくおもへば思ふほどお俊が恐ろしくまた憎
 く、庄兵衛が怖く、昨晚といふ夜が腹立しく、茫然として意氣地な
 くなり居るよ、尙憎いのお俊が何かと話しかくる其聲の、悪く細か
 しく悪く清げあること、彌吉が人の氣も知らいで長閑あることなり。
 折しも願のざるよ庄兵衛ふらりくと酔歩あふなく歸り來るよ平日
 ならば、走り出て我肩に扶け、御歸りよありましたと叫びながら家
 へ入るべきよ、今日の主人が顔見るとひとしく、頭縮みて肉動き、
 おもはず知らず何いふ譯とも自分で了らぬ間も自分の足が駈け出し

て、裏口より半町ばかり歩みしが、其儘下田より逃げ歸りたくもなり、また全で人も心付ず自分もかもし寄らざる遠くの國へ走つて行きたいやうな氣持もあり、といふて如何ともし難きよ其所等たいうろろと歩きまはり、遂に一度是非なく歸家らむとして裏口まで來り、また引返して逃げ、二度裏口へ來て尙入り得ず、いつそ乞食しても下田へと其所去つて五六町行けど流石に歸家たくもなり、三度め裏口へ來しが尙入り得ず猶豫するところへ、彌吉横合からぬつとあらはれ、何をして居る家へ這入がよいでないか

第四十八

立ち退く仔細の知らし得ず

心無き雲の形状も破戒の僧よの夜叉と見えて恐ろしきためし、彌吉が一言よ彦右衛門膽玉を破られしが、別段何といふ意味もなきよ今さら我がびくりとせしを心の裏よ耻つ、内へ這入りて、様子うかい

へバ、小而憎きはど女の度胸すとりて、常よ變ることなきお俊が口のき、やう身の扱ひやう、夢よも暗いことなきとき風情、どろりと横よなりしま、倒れ居る庄兵衛よ露關ひもせで長火鉢の脇に坐りしま、悠然と煙草ふかし、輪よ吹く煙りの末を眺むるの扱も恐ろしい奴、女といふもの都て思ひ定め男よりの強きものか、庄兵衛の何も知らねバ意久地なく寐たるま、論なし、彦右衛門の唯憐々と怖れを懐いて私とお俊が顔見るよ、お俊笑を含んで見返す其眼つき實に可厭なりし。斯くて平日のお俊の氣よも入りまたお俊をも好きたる彦右衛門今日のたちまぢ大の嫌ひよなりて、お俊をバ仇のやうにおもひなし、なるべくの我が顔も見せじお俊が顔も見じ、言葉かけらる、ことも無いやうよ言葉かくることもないやうよと心掛け、遠ざかり隔り居るやう爲るよ生憎何彼と呼びつけての左したる

用でもなきよ面前より引き出され、其度毎に空恐しい心地のせしが、
 日も暮れ行きて夜食も終り、皆々休みて唯休めざるの彦右衛門いる
 くの方角お一ツの心の馳せ飛んで、故郷のこと、叔父のこと、お
 かげまわりせし途中のこと、久太郎のこと、喧嘩せしこと、佐十郎
 に逢ひしこと、其の前夜の鯛鮓屋のこと、柳の辻へ來しこと、それ
 より染物の大概の記はしこと、惣五よ逢ひしこと、之から先の我が
 身の何なるものかといふこと、此家の到底長くの持堪へられまじと
 いふことなどよ考へいたり、終りの分散のあかつき、詰らぬもの
 我と彌吉となり、主人夫婦の自分で仕出來したる報いを自分で取る
 なれば是非なければと其飛沫を受て幾年の奉公無益よなるが馬鹿々々
 しく、また我とても此家よ居て毎日々々お俊が顔見ることの辛くし
 て到底此所よの居悪ければ、此所立去りて逃げ走らむか、行くべき

目的の地も無ければ全で目的なくての野犬のやうよ歩くことまさか
 よ出來難く、故郷よ歸らむか、歸つても第一叔父初め知つた人に合
 せべき面も無ければ、他所へ走らむか、走つても詮なし、然らば長
 く此所よ此儘止まり分散の曉まで井桁屋の飯食ふべきか、それの差
 し詰め一番容易きことながら如何も彼お俊、お俊様との主人でも
 云はじ、彼お俊めが而見ることの苦しくてお俊めよ聲かけらる、こ
 との厭でく堪らねば、佐十郎さま庄兵衛さまよの濟まぬを百も承
 知なれど兎角身を退くより他よよきことなし、おもへばく我も今
 年十七、身体大きく力量も強し、何をしてなり一人前の男となれぬ
 ことのあるまじきよ、いつまで無益よ日を送るべき、此所へ來てよ
 りの主人夫婦の氣よ入られむとばかりよ自然心弱くなり、一つの京
 都の人氣よつれて女々しくばかりなつたるらしく、十三四にして下

田飛び出せしよ比ぶれば今此所飛び出づるに面倒のある譯なし、左
なりく、此所立ち退く譯ある故に立ち退く譯なれど其立ち退く譯
の立ち退くはどの譯なれば仔細明らかさまよ庄兵衛さま佐十郎さまよ
の云ひ難し、是非今無益なり、立ち退く分別ばかりと僅よ決心す
るとき丑の刻の鐘耳よ入ぬ。

第四十九 戸を出て逢ふ罪を洗ふ雨よ

今夜を空よ過すやうでなま九明日の夜をも空よ過すべし、思ひ極め
し上の何をか疑ふべき、家内寐静まりしこそ幸ひ我が足を此可厭な
井桁屋の鴨居の外よ踏み出すべき時なれと彦右衛門静と起き上り、
忍びくよ着物一枚手拭腹巻、貫ひ溜し小銭など取りあつめ、身繕
ひして扱書ける腕持たバ一筆故郷戀しくなりて堪らねば歸ります
と何所へなり記し置きたきところなれど、文字知らぬ悲しき此時覺

初めて、誰よこととり云ふべきよもあらぬより黙つて立出る三年
越し恩よなりし人の家、あまり好い心地せねば氣も自然急きてか彌
吉が枕よつい躓いて、盗みよでも入りて咎められしやうよハツと驚
き、眼醒めよせざるやうすよ胸撫下しつ、やうやく雨戸一枚静よ引
き明くるよ生憎ごろくといふ音響いて、起て居しか早くも眠りの
覺めしかお俊の聲として彌吉かと呼ぶ、畜生めと口の中で云ひなが
ら其よ返辭のせで、戸外を眺むれば最早明るかるべきよ、天の一面
眞黒な雨雲よ鎖されて、星の光さへ見えず、闇を吹く風冷たく渡り
て思ひある身よ何とも彼とも云ひ様なく凄じき景色、犬の遠吠例
のことながらひとしほ悲しくも聞ゆるよ、流石彦右衛門臆病な氣も
出て、一と思ひにの飛び出し得ず、躊躇ながら前面をすかして再び
見る其時またもや彦かと呼ぶ聲のお俊、エ、畜生め汝が其聲もう聞

くものかと、思ひ切る時礫のごとく駆け出し、方角も何も殆んど夢
中よ三條の橋やら何やら知らぬほど只走り去りけるが、折ふ
し颯と吹き下す風いよく冷く、ポツリくと降り来る大粒の雨、
仕合せ悪しと唧の間もなく、どつと降り出して休みさうな様子もな
し、是のまた迷惑な、罪ある身をば天も憎み玉ふて出るが否や先第
一よ此雨を降らしたまふか去りとしての情なし、さりながら今さら歸
るもならず行くの堪忍さへせば行かざるべし、心ざすあての無けれど
惣五様の居らる、池月へ何時か行くとはいふ心當して差しあたり大
阪よ行くべし、此雨の我が罪の幾許かを洗ひ落すものとおもへば厭
ふべきにもあらず、家よ居て心地あしく曇り空の降りさうで降らぬ
境界に居むよりのと篠突くばかり降る中を走りぬ

第五十 うつりて見ゆる我影薄し

懐中よ旅の心細さを強ひる財貨といふもの無くて、糧もつゝまず行
かんとせる百里の道、年長け世慣れたる者さへ之よの弱るべき小況
して行く先も不確實よて他人の中も多くの踏むだる覺えなき彦右衛
門、加之恐ろしき罪を荷擔ての憂き旅、出奔の當時から邪見な雨よ
濡れ、翌日の赫と照る暮秋の日お射られ、大坂もそこよ通り抜
け、兵庫須磨明石の好景も眼よ面白しと見ることもなく、葭簑張りの
茶屋よも錢を惜めば立ち寄りで、渴しての飲む路傍の清水、掬飯よ
梅干、野中よ笠を柵として獨り濟す晝食、加古印南も夢と過ぎ、草
よ名高き姫路より西海道を傳へりて十三時辛く越え、途中よ廢り
し片足の草鞋拾ふて穿くほど悲しくも儉約なしつ、廻り行き、備前備
中備後の尾の道よさしか、りし時、日の西方よ落ちて海面美しけれ
ど、思ひある身よの憂愁の湧く夕暮、つくづく此身の行く末をおも

へば根の絶し薬の寄るべ定まらず、風は任する雲より頼み少く、何なるべきとも自分ながら分らず、そもく最初下田出し時の無分別より事起り今此様憂きめ見ること自爲しとの云へ餘りも拙く、よしや今の兎もあれ終りの一人前の男にならであるべきやと自分の望みを自分で當すればこそ苦しき道をひろひく、昨日今日との過すものゝ、ゑせ強がりの根性も眞實の此頃漸く撓みて、通りそがりよ見る他所の家の奉公人の我と同じ年頃なるが健く働く姿の快活氣なるよさへ坐す羨みの念萌し、我も過日までの彼ごとく天地は愧ることなく快よく労働き快く眠りしよ、何となく今の他人より萎縮てならず、怪しからぬ事を酔の餘りなればとて又あの畜生のお俊といふ悪徒めも欺かれたればとて仕出して、悲しい眼は逢ふことよ、人の七轉び八起といふこと聞き居れば、また好きことの有るかの知らぬ

ど少しも腹は勇氣なく有てるの一ツの罪ばかりの我、遂に如何なるものかと、自然首さへ俛れながら行く向ふより来たの左りへ右へ踏跟となりつゝ千鳥足運ばして、それでも生酔本性違はず彦右衛門に衝突つて自分を悪といふもはで、此大道で人々衝突る痴漢あるか眼を開いて歩けと高聲に罵られ、黙つての居難きところなれと暗いところ有つ身の、抵抗はず逃げる機会、今度の全く我が眼の眩みしか来か、る人々此方から衝突つて、御免下されを口早に云ふま、頭をあげて見れば、雨天さしの傘さしかけて紺の着物は純白な肌の膜りよき中年増の健いお俊、ハッと再度吃驚、小砂利交りの地上に動と坐して、何とでもせよ到底つまらぬ我をと、一切夢中に眼を瞑いで云へば、其聲やさしく、粗忽のあり勝ちなもの、酔漢をお避けなざる機に妾に行きわたられしとて其様よひづかしら御謝罪よの及び

ませぬ、と云ふの何やらお俊ならず、再度顔を静とわけて見に思の
 下に大きな痣あつて眞實お俊でいなく、好く見るよ顔立さへ違ふた
 り、馬鹿らしや、これは迄まで弱身あれや愚なるものか、今の
 さま狂氣じみたりとおもはれんも耻かしと急に立上り無法な蹴けし
 も可笑し、かくて安藝入り四日市西條も経るま、廣島の城下につ
 きけるが既十月の半過ぎ、風寒く身体衰へて錢の缺さへ無く進退さ
 はまり猿猴橋の上よた、すみしまゝ空しく水の流れを眺むれば、嘆
 りて見ゆる我影薄し

い き お と り 上 編 終

明治二十四年十一月十八日印刷
 全 二十四年十一月廿二日出版

定價金 壹拾錢

著 者 幸 田 露 伴

東京市京橋區南傳馬町二丁目十四番地寄留

發 行 者 青 木 恒 三 郎

大坂市北區堂島北町二百十一番屋敷

印 刷 者 加 藤 龜 太 郎

大坂市中心齋橋筋安堂寺町

製 木 所 青 木 嵩 山 堂

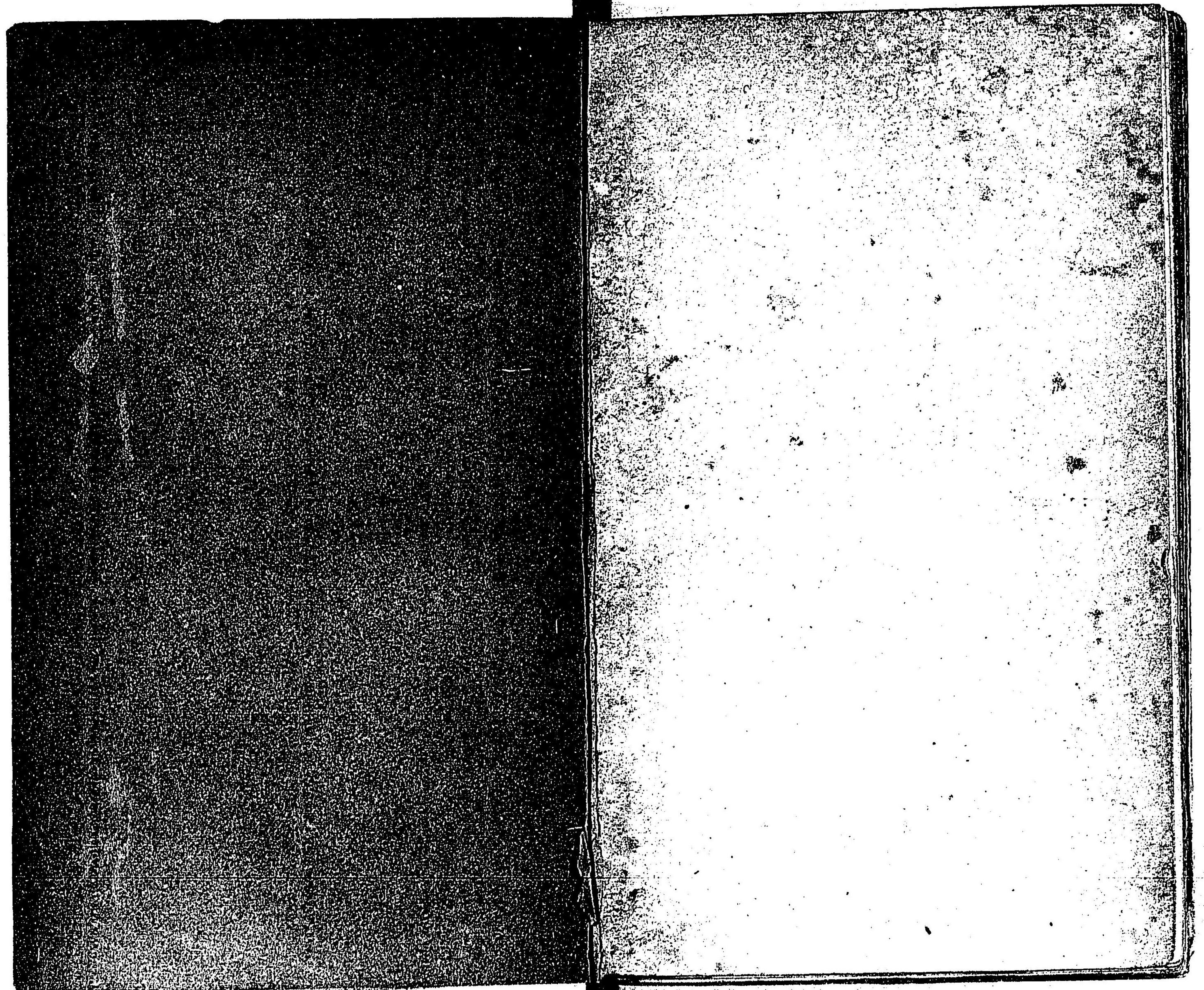
東京市京橋區南傳馬町二丁目

發 賣 所 青 木 嵩 山 堂

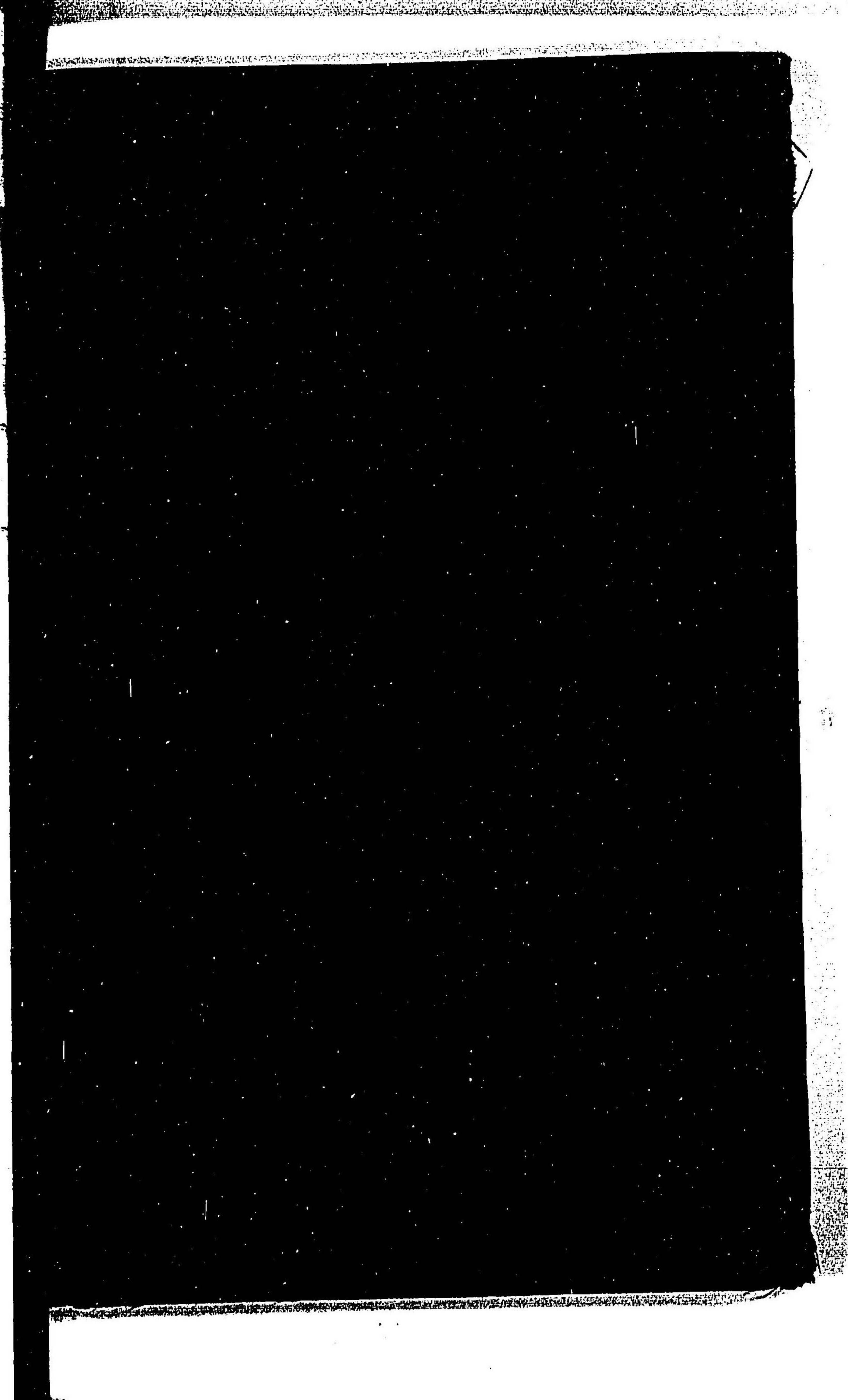
豊州四日市港堅町

全 嵩 山 堂 分 店





68
133



092856-001-0

68-133

いさなとり

幸田 露伴/著

前編

M24, 25

DBQ-0149



